

## 圖版解説

### 王諤筆 山水圖

本誌二二一號の「送源永春還國詩畫卷と王諤」に、それまでに知られてゐた王諤の作品と傳記史料とをひとりと紹介したが、このたび王諤の款印を有する未知の一畫蹟に接したので、ここに圖版として掲載する。

遠峯は勾勒と沒骨とをまぢへ、中景危峯にいだかれて木立をめぐらした樓閣があり、山すその煙霞のうちに屋根が見える。近景を大きく占める柳樹の葉は風にそよぎ、その下に騎馬の人物、馬側に一人、ややおくれ一人の從者がをり、荷をおろした樵夫が、圖の左方、橋のあなたを指して馬上の人物に語つてゐる。何か故事あるひは詩意に本づく畫圖と察せられるが、主題を明らかにし得ない。左側上方に近く「錦衣千戸東原王諤寫」の落款があり、その下に「廷直」の白文方印、「東原叟」の朱文方印があり（挿圖參照）、上方中央に「欽賜王諤圖書」の朱文長方印がある。これらの諸印は送策彦周良還國圖（本誌二二一號、圖版第二）に押されたものと同印と思はれ、「欽賜王諤圖書」印のあることにより、さきにのべたごとく「同、一七頁」、一應正徳五年（一五一〇）以降の作といふことになる。ところが本圖の落款を見ると、「諤」の字の言偏が省筆されてゐる。從來知られた王諤畫の場合、晩年の小品に至るまで筆劃の省略を見ない。さらに畫絹の歪みを考慮に入れても、落款がやや浮いてゐて力が抜けてゐるやうに感ずる。一方王諤は浙派の畫家とされてゐる

が、この圖は、筆技筆力を誇示して粗硬でさばがしい嫌のあるとされる浙派のうちに加へるよりは、靜穩柔軟で一種古典的畫調に一抹の情趣を湛へる院派に近い作品と觀る方が妥當であらう。しかし一概に浙派といつてその特質を右のごとく概言するけれども、その研究は未だ全般に互り具體化してゐるとはいひ難い。文人畫家と異り、職業畫人の出處進退には年代的徵證を缺くことが多く、かれらの作品の年次を定置することもきはめて困難である。そのため浙派の様式内容や成立と展開の過程の解明は、近時やうやく緒に就いたに過ぎない（『東洋文化研究所紀要三四、鈴木敬「浙派の成立と展開」（研究會發表要旨）參照）。他方王諤は孝宗から「今馬遠」と賞讃されたといふ。もし當時の宮廷の好尚が情趣の表現に傾くものであるならば、「今馬遠」の讚辭は、南宋院體畫に畫系の源をもつ院派の畫風、あるひはそれを加味したものに主として與へられたと推想しても、さしつかへないであらう。このやうな事情を考慮するとき、右に記したこの山水圖の畫幅の現状や、いはゆる浙派の概念は無視し得ないが、過眼の王諤畫に比して出來ばえも一段とすぐれた本格的作品であり、一應王諤の筆として本作品を提示することは、浙派ないし明代宮廷畫派研究の今後の進展のためにあながち無意義ではあるまい。

卷留に「明錦衣千戸王諤山水神品 金匱錢泳謹題」の題簽があるが、錢泳（一七五九—一八四四）は清代中期の文人、字は立羣、梅溪と號し、金匱（江蘇無錫）の人、『履園畫學』（上海人民美術出版社刊『画史叢書』所収）の著がある。この畫幅の本邦に流傳した時期も推察されるであらう。

川上 涇

を考慮に入れても、落款がやや浮いてゐて力が抜けてゐるやうに感ずる。一方王諤は浙派の畫家とされてゐる

挿圖 王諤筆山水圖款印